

## 梅と肥 (2018-2-23)

40年ほど前、植木屋から、「これは加賀梅と言ひ、花がきれいで、茶花になりますよ」と言われ、庭に加賀梅を植えた。私は加賀と聞いて、ぴーんときた。加賀100万石、風流な殿様がいて、芸術文化が栄えたところなので、さぞ、その梅も優雅なものであらうと期待した。

その金持ちの殿様が芸術文化に関心がなく、武器など買い集めれば、北陸地方は穏やかではなく騒がしくなっていたかもしれない。やはり、芸術文化は世界の中を穏やかにするのに大いに役立つ。いま、中東あたりで騒いでいるテロリストどもは、芸術文化の教養に欠ける連中ではないかとも思う。

加賀梅は、2月半ばを過ぎると、少し灰色がかった白い花を咲かせ、さわやかな香りをほのかに漂わす。まことに上品な早春の風情である。

花は3週ほどで散り始める。そして、花の後には、すでに小さい実が膨らみ始めていて驚く。まだ日中は寒く、葉も出ていない小枝に点々と実が並ぶ。木の実は、葉での光合成の産物と、根からの養分で大きくなるものと理解していた私に、葉のない小枝に並ぶ梅の実の不思議さに、「なぜ」という疑念がわいた。

でも、少し考えれば何でもなさそうである。根からの養分だけで当座をまかなっているに過ぎないのではないか。以前、梅には肥が沢山いると聞いたことがあるが、それは梅のこの習性かも知れない。おそまきながら、加賀梅の花だけを楽しんでいた私は、梅にしっかり肥をやれば、実も十分できることに気付いた。

加賀梅の実は、大きからず小さからず、3cmほどの大きさに、はち切れるように丸々としてエメラルド色に輝く。花だけでなく実もきれいである。

加賀梅から、人間も肥が効いていなければ、良い実がならないのではないかと、勉強させてもらった次第である。自然は素晴らしい。